

北泉優子

忍ぶ橋

吉野の女の物語





ゆまにて出版刊行の辞

全地球の危機が語られている今、日本もまた、その危機感の流れの中に惑い、指導理念を喪失し、歴史ある文化・哲学を忘却し、道徳も、また見失っています。そして一時の高度成長に酔って、ぜいたくという情性の中で生活している現状です。そのあげく、人間にとつての善悪の判断まで難しくなってきたようです。かつて私たちの祖先は自然を尊び、信仰・文化・芸術のなかにきびしきによる欲びを見出し、美と伝統と精神の追求にたゆみなく勉めて居りました。

ゆまにて出版は、激しく速い現代社会の潮流の中で、ともすれば物質文明の枠に喘いで、生きる欲びと、人間の心の原点を見失ないつつある若い世代の人びとに、心豊かに成長し、魅力ある人間像を創造するため、その心の糧となるべき素材を提供しようとするものです。

ゆまにて出版が「読者の感想」の頁を設けましたのも、私どもこのような願いからです。ゆまにて出版の本に限らず、一冊の本を読んだ時、何を感じ、何を考えたかを率直に忌憚なく書きしるしていただきたいと思ひます。

一冊の本の真の価値は作者や出版社の名に、いささかもかかわるものではありません。ただ読者の心に何を訴え、何を残したかによってのみ評価されるべきです。

ゆまにて出版で刊行された本が読者自身の精神と歴史の書となることを念願してやみません。 常泉 隆介

ゆまにて出版

忍ぶ橋 吉野の女の物語

昭和 49 年 11 月 25 日
昭和 50 年 6 月 16 日

初版発行
第 7 版

著 者 北 泉 優 子
発 行 者 常 泉 隆 介
発 行 所 株式会社ゆまにて

東京都千代田区平河町 1-4-12
中政連ビル 〒102
東京03 (264) 4101 (代表)
振替 東京115812

印刷 特進印刷株式会社

万一、落丁・乱丁がありました節は、お取りかえします。

忍 ぶ 橋

吉野の女の物語

忍ぶ橋

吉野の女の物語

装丁
橋本
潔

第一章

海は穏やかだった。碧瑠璃色の海面に、やわらかな晩秋の陽光が碎けて、きらめき渡っている。行き交う船の姿も見えず、六甲の山脈も今はもう遠くはるかに霞んで、ひろびろとした海原が視界のかぎり続いていた。

流し固めた寒天を思わせる静かな波間を分けて、定期船がすべるように進んでいく。その船の航跡だけが、ひと握りの白い波浪となつて騒いだ。だが、それも瞬時で消え、海は再びもとの静穏な貌に立ちかえる。秋日和、そんな言葉がびつたりの暖かな午後であつた。それでも、肌をなぶる汐風は冬の訪れの近いことを伝えてさすがに冷たく、そのせいか、甲板の人影もひとり減りふたり減りして、いつかまばらになつてしまった。

中桐晶子^{しやう}は、後尾の甲板に立つて、さっきからずっと海を見つめていた。馴れぬ汐の香が鼻につき、不快感がこみあげてきたけれど、父の居る船室へ戻る気にはなれなかった。

船は一路淡路島の洲本港へ向かつていた。あと二十分もすれば到着する筈だった。その洲本の警

察へ、晶子は父辰造とともに、母の遺体を引き取りに行くのである。尋常ではない死に様をした母と、父はどんな顔で対面するのか。最後の最後まで、けにされた父の胸中を思うと、晶子の胸はつぶれた。それなのに、父は逆巻く感情をすべて押し殺し、さりげない表情を崩さずに、自分への優しいいたわりを示してくれる。娘として、そんな父を見るのはしのびなかった。だから、父のそばを離れ、ひとり海を眺めているのである。

海に視線を投げていると、小さくうねる波の間から、ふいに母の微笑が浮かびあがってくる。笑顔に引きずられて、このまま海原に身を踊らせたい衝動にかられた。母もこの海を眺め、淡路島へ渡ったのだろうか、その時波間に浮かんでは、自分の姿だったのか、それとも妹の由美だったか。晶子はコートの襟を立て、そのなかに顔を埋めてそっと眼を閉じた。鏡面にも似た波の残像に重なって、この日の朝、晶子たちが遭遇した悪夢の瞬間が、鮮やかに甦ってきた。

それは午前十時頃、突然、なんの前ぶれもなく起こった。

吉野の里国^く栖^ずで紙を漉く晶子は、この日も、前日漉きあげて水切りを終えた和紙を、広い前庭いっぱいに乾^ほしていた。仕事が順調だといふ鼻唄が出る。父も同様らしく、朝っぱらから、土手の柳は風まかせ、好きなあの娘は……などと気持よげに口ずさんでいた。

「吉川さんやないけ、なんやろ血相変えて」

片隅で洗濯物を乾^ほしていた祖母のたみの声で、二人は同時に顔をあげた。

「どうした。駐在所に強盗でも入ったんかいな」

急勾配の坂道を息を切らしてのぼって来た老巡査を、辰造はからかった。

「辰造はん、奥さんの消息が判明した」

「え？　ほんまか。宮子が見つかったんか。で、いま何処に？　東京か、大阪か、それとも——」

たたみかける辰造の口を手で封じた吉川は、まるで異物を吐き出すように一氣にしゃべった。

「淡路島や。淡路の洲本。たった今、洲本署から連絡があった。中桐宮子さんが今朝早く死体で見された。他殺やないで。まあ自殺ちゆうか、男と一緒に死んだらしい。遺体確認やなんやで、至急来てほしいそうや。詳細はむこうで訊いてくれんか、ほな、氣をつけてな」

腕白坊主の頃からの友人に向かって、非情な宣告をした吉川は、御愁傷のひとつも失念したまま、あたふたと帰っていった。

しばらくは、家族の誰もが茫然と立ちつくしていた。真っ先きに立ち直ったのは、祖母のためであつた。ぶざまな死に様^{さま}をして、と吐き捨てた彼女は、

「喪服を持っていきなはれ。勝手放題の嫁でも、海へ投げ込んでくるわけにはいかんさかいな」と、家のなかへ入ってしまった。

「お父ちゃん」

「お前も行くか。宮子が一番逢いたかったのは、晶子、お前やさかいな」

晶子は辰造を正視できなかった。どこまで父を踏みつけにすれば気がすむのか。半年前、材木工場で働く若い工員と手に手を取って蒸発した母は、今また男と心中し果て、父の深い傷口を容赦なくえぐったのである。肉親を突然失った悲しみにもまして、この時の晶子の心を捉えたものは、身勝手な母への立腹であり、父への同情だった。涙は出なかった。母のために流す涙などひとしずくもない。そんな抑制心が、咽元をつきあげる肉親の情を殺した。

知らされて身も世もなく悲嘆にくれる妹の由美を荒い声で叱った晶子は、小一時間後、辰造とともに吉野を発った。

「晶子、人間は誰でも二本の糸でつながっているんやで。情なさけの糸と義理の糸や。辰造は義理の糸で迎えに行くんやさかい、涙は見せへんやろけど、あんたは違う。親と子オをつなぐ情の糸を切ったんは、おかあちゃんの方やけどもなあ、あんたまで切ったらあかんで。誰にも遠慮せず泣いたりや。死んでもたら、みんな仏やないけ」

家を出る間ぎわ、たみが言った言葉は、己の立場を弁えて涙ひとつ零こぼさぬ孫への、かぎりないいたわりに充ちたものであった。

ふいに鳴り響くオルゴールの音で、晶子は現実に立ち返った。螢の光のメロディに、到着を告げるアナウンスがかぶさった。いつの間にか、船の速度が落ち、目の前には、発着場の白いターミナルビルが迫り、濃緑の山ひだに林立する旅館の名前さえ判読できるほど、はじめてその土を踏む島

は間近にあった。晶子は急いで船室へ戻った。

最後のひとりになっても、瞑目したまま動かない辰造を促して、やつと錨を下ろした船のタラップを渡った途端、旅館の客引きらしい若い男が揉み手で声をかけてきた。

「だんな、鳴門の海が一望の部屋が空いてまっせ。サービスさせてもらいますがな」
なにを勘違いしたのか、げすな愛想笑いを見せる男に、辰造が厳しい表情で怒鳴った。

「宿は決まってる。警察や。わしは女房迎えに行くんや、ほかの男と心中した女房をな」

あとにも先きにも、これが辰造のあらわにしたたった一度の激昂だった。

洲本署へ着いた二人を待っていたのは、年輩のいかにも律義な刑事であった。型通りの悔みを述べた彼は、配慮深く言葉を選びながら、事の経緯^{いきさつ}を説明してくれた。

宮子は洲本の小料理屋で三月ほど前から働いていたらしい。ひとりでふらっと現われ、使ってくれと頼んだと言う。その小料理屋へ、前夜、上品な老紳士が飲みにきて、相手をしたのが宮子だった。どんな風な交渉があったのか、二人は男の投泊する旅館で一夜をともにした。そして、心中したのである。

「男の方が先に絶命していました。情交のあと熟睡している所を、腰紐で絞殺されたようですな。男の死を確認してから、奥さんは自ら睡眠薬を飲んで後を追ったらしい。遺書など動機をものごたるものは、なにひとつ残されておりません。男との関係も、昨夜はじめて知り合ったと女将も証言

しておるし、なぜ、ゆきずりの男を道づれにしたのか皆目判りませんな」

「その方の身元は？ お名前はなんとおっしゃるのでしょいか」

慄え声で問う晶子にじっと眼を当てた刑事は、

「奈良市水門町の宗方春之、五十七才。奈良人形とかいう一刀彫を扱う美術商の主人です。むこうでは縁もゆかりもないと言うとられますが、心当たりでもおありですか」

と、今度は辰造へ視線を移した。

辰造があるかなきか首を振るのを待って、彼は一葉の写真を卓上に置いた。雑誌のグラビアから切り抜いた手札型ほどのものだった。

「奥さんの枕辺にあったものです。調査したところによると、園田征彦まさひことかいう有名な日本画家だそうです、その園田氏と宗方春之氏が、うりふたつと申しても過言でないほど酷似しておるのです」

辰造の肩がぐんと落ちた。握りしめた拳こぶしが、テーブルの陰でこまかに慄えている。たまりかねた晶子が、両手で顔をおおった。

「どうしました？ なにかご事情でも？」

遠慮がちにひと膝のり出す刑事に、辰造は静かな口調で応えた。

「園田はんは、宮子の昔の男だす。この娘の、晶子の実の父親だす」

刑事はしばし黙した。そして、誰にともなく、むしろ自身へ自問自答するように、もそつと呟き、自ら幾度も頷いた。

「身がわりというわけかな。ふん、きっとそうや」

窓の外はすべて暗闇に沈んでいた。そこが海である証はただ絶えることのない潮騒だけであった。眼を凝らすと、はるか彼方に漁火が赤く小さくちかちかと瞬いている。漁火は昨夜も見えたのだらうか。母がこの世の名残りに眺めたのは、腹を痛めた娘たちでも、二十年近くつれ添った夫でもなく、こんな小さな赤い灯だったのか。ふいに、予期せぬ涙が晶子の頬を濡らした。

「はよお休み、明日もしんどいで」

「へえ」

すでに床へ入った辰造の声は、蒲団をかぶっているためか、くもって聞えた。返したのはなま返事だけで、晶子のまなざしは、細目に開けた窓の外に向けられたままだった。

晶子は、それを父に切り出すべきか否か迷っていた。宗方家の遺族が泊る宿は、この旅館と四、五軒の家を挟んで並び建っている。このまま、なんの挨拶もせず、沈黙を守っていいのだろうか。むろん、詫びて済むことではないが、せめて、畳に頭をすりつけ母の不始末の赦しを乞うのが、人としての礼儀ではないのか。やすらかな死顔の母にくらべ、相手のそれは、生への執着をむき出

しにした凄惨なものだったと、温厚な刑事が問わず語りに教えてくれた。宗方春之という人はいま、家族に見守られてその宿の一室に安置されている。たとえ明日までの一夜でも、見知らぬ女のそばには夫を置きたくない。そんな気持ちにかりたてられて、渋る旅館を説得し、遺骸を移したに違いない。昼間、母の遺体と対面した霊安室でそのことを聞かされた時、晶子は、宗方夫人の深い悲しみを思い、無縁の人を傷つけた母の罪を思つて、身体の慄えが止まらなかった。

「身がわりに殺^やられたんじゃ、仏も浮かばれんよなあ。氣違ひみたいに泣きわめいていた奥さんが氣の毒で、見ていられなかったですよ」

立ち合った若い係官の無配慮な言葉が、いまでも晶子の耳朶に残っていた。

（おかあちゃん、なんで他の人^{よそ}なんか道づれにしたん？ 野たれ死にするんやったら、どうしてひとりで逝^いかへんの。こんなひどいことするなんて、お詫びのしようがないやないの。）

たったひとりの母だった。その奔放な生^{いき}き様^{さま}は周囲の顰蹙^{しんそく}を買ひ、非難のつぶてを浴びた。だが、晶子にはこよなく優しい母であった。その母に恨みごとを投げなければならぬ己が哀しかった。うしろめたかった。けれども、そう仕向けたのは、ほかならぬ母自身なのである。

逡巡^{しゆんすん}の末に、晶子は宗方家の遺族が泊る旅館へ出向いた。辰造が寝入るのを待つて、ひそかに部屋を抜け出たのだ。祖母の用意してくれた喪服は、まだ仕付け糸がついていた。晶子はそれを、玄関に続く狭いロビーでそとと取った。通りがかった女中が、なにも言わずすつとしゃがみ、裾の白

い糸を切ってくれた。どういう境遇なのか、母と同年輩にみえるその女の髪は白髪が目立ち、シャ
ンデリアの淡い光線を受けて光っていた。この時、はじめて晶子の胸に、母を失った実感がこみあ
げてきて、彼女はしゃくりあげた。女中は軽く晶子の肩に手を当て、それから、やはり無言のまま
去っていった。

その部屋の廊下に腰を落した時、晶子の顔に涙はなかった。

「中桐の娘でございます。夜分遅く失礼とは存じましたが、父に代って、ご挨拶に参上いたしました
た」

「どうぞ」

故人の子息なのだろうか。冷えた声音の男の声がした。帳場で連絡を頼んだ時は、その必要はな
いと拒絶されただけに、晶子はほっと息をついた。

ふすまを開けると、強い線香の香とともに、三つの視線が晶子を射竦めた。

「このたびは、母がとんでもない不祥事をしでかしまして、申し訳ございません。詫びて済むこと
ではございませんが、どうぞお赦しくださいます。この通りでございます」

闖り入った部屋の隅で、頭を深々と垂れる晶子を、三人は無表情に黙殺した。

「おかあさん、この人も被害者や、なにか言うてあげたら？」

救われる思いで晶子は顔をあげた。助け舟を出してくれたのは、若い、まだ少年と呼んだほうが

似つかわしい青年だった。瞬間合った眼を、彼はあわてて逸らせた。宗方夫人を挟んで、もう一人の男性が居た。母親似のぼつてりとした顔だちで、息を呑んだように晶子を見つめている。そのまなざしが、身内にからみつくように感じられて、晶子は乱れている筈のない胸元をかき合わせた。次第に緊張が増し、脇の下がじんわりと汗ばんでくる。折角の青年の取りなしも功を奏さず、夫人は蒼白い二重あごの横顔を見せて、そっぽを向いたきりであった。

「おかあさん」

青年が再び促した。低声だが、その響きは甘く澄んでいた。

「うちはまだ、一本の線香も母には手向けておりません。宗方さまの御霊前に手を合わせ、ご遺族のみなさまにもお赦しをいただいてからやと、決めていたからでございます。奥さま、せめてひとこと、亡くなった宗方さまに母の不始末を詫びさせてください。お願いです」

「お断りします。なんぼ詫びてもろても、父が生き返るわけやない」

鋭い男の声が戻ってきた。吐き捨てた言葉と裏腹に、長男らしい男の眼は、なおも晶子を追って動かなかった。

「兄さん。親を亡くした悲しみは誰も同じや。それをこの人はじつと我慢して頭下げに来てくれたんや。その気持も汲んであげたら？ この人には罪はないんやから」

「お前は黙っとれ」

弟の言葉を、兄は高飛車に封じた。

「お前になが判る。おやじのあの死顔を思い出してみる。おやじはな、生きてたら、来月おふくろと海外旅行へ行くことになっとったんやぞ。その旅行を、どんなに楽しみにしていたか。それを、飲屋の女風情に殺されて……」

きりきりと異様な音がした。次の瞬間、水晶の白い珠が、ぱっと畳の上に散乱した。宗方夫人の握りしめていた数珠の糸が切れたのである。その珠をわし掴みにした夫人は、いきなり、それを晶子めがけて投げつけた。一つの珠が晶子の血の気のない頬に命中した。だが、彼女は畳に手をついたまま、じっと耐えていた。

人殺し……。腹の底から絞り出すように夫人が呻いた。そして、堰を切った勢いで、憎悪を迸らせた。

「人殺し。あんたのおかあさんは人殺しや。訊けば、さんざ男狂いをした揚句に、家も子供までも捨てて男と逃げたそうだな。そんなふしだらな女おんなの道づれにされて……。あんたの母親というお人は、犬畜生や。人で無しの虫けらや。そやさかい、残されたもののことなど、露ほども考えなかつたんだすやろ。あんたのおかあさんに、春之の生命を奪う権利があるんだすか。わたしらを奈落の底に突きおとす権利がおますのか。しらじらしい詫びごとの真似などせんといっておくれやす。あんさんも母親の血をひく娘、心の中でべろりと赤い舌出してますのやろ。殊勝げな態度をかなぐり捨てた。